

浄土

monthly 5500

2019
January

1



法然上人鑽仰会

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



店が閉まっているときも、この白は店の前に置かれたままである。誰もこんなものを盗んだりするはずがないと、店主が判断したのだろう。

近所の総武線のガードのすぐ横に、古美術店ができたのは六年ほど前のことである。店が開いているのは週のうち三日ほどだ。ときには一か月近くシャッターが下りていることもある。

開いているときもシャッターは上三分の一ほど下がつており、やる気があるのかないのか、不思議な店である。客が入っているのを見ることがない。ガラス越しに店内を覗くと、手前には備前と思われる大壺が二つと、小さな壺が三つほど並び、左右の壁面の棚には数点の焼き物が飾ってあるだけだ。

ある日、店主と思われる四十代中頃の男が奥の椅子に腰掛けているのを見て、思い切つて店に入ることにした。男に「見せてもらってもいいですか」と声をかける。「あ、どうぞ。大したものはありませんが」と男。たしかに大したものは並んではない。骨董市でよ

く見かける、大皿や蕎麦猪口の類が作り付けの黒い棚に無造作に置かれている。

「このお店は閉まっていることが多いですね」と話しかけた。「私ひとりだからね、買い付けに行くと閉めるしかないもんで」と言いながら男は、足元のトランクを指差して、「明日からまた韓国に買い付けに行くんで、しばらく店は休みます」とのことだ。

韓国に買い出しに行くといっても、店内には韓国の骨董品らしきものはなにもない。買い付けた品物は、店で売るのはなく、おそらく業者の市でさばかれるのだろう。そのあたりのことは村田喜代子の小説「人が見たら蛙に化れ」で読んだくらいで、詳しくは知らない。たとえば古書店でも、店頭での販売よりも市での商いの方が大きいのではないだろうか。

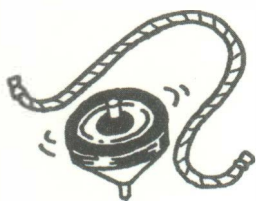
その後も毎日のように店の前を通るのだが、店内の品物は入れ替えもなく、ずっとそのままである。もちろん客もいない。

写真は店の外に置かれている木の白である。古美術というよりは民芸品であろうが、雨風に曝されていい具合に古びている。しかしこれを欲しいとは思わない。広い庭でもあれば水を張って、金魚かメダカを飼ったり、睡蓮でも植えたいのだろうが、都会のマンションの狭いベランダでは邪魔になるだけである。

浄土

2019/1月号 目次

法然上人と親鸞聖人	林田康順	2
法然上人とお弟子たち	石丸晶子	8
連載 江戸の川を歩く②7	森 清鑑	18
新連載 微風吹動	石田一裕	24
連載小説 渡辺海旭⑨4	前田和男	28
仏教コラム	佐々木美冬	34
連載 マンガ さっちゃんはネツ	かまちよしろう	35
編集後記		40



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人 と 親鸞聖人

【連載再開】

親鸞聖人が捉えた
「浄土三部経」⑤

林田 康順

(大正大学教授)

お詫び 一昨年末に発覚した脳腫瘍の手術・加療に伴い、昨年ほぼ一年にわたり連載をお休みしてしまいました。ご心配をいただいた読者の皆様はもちろん、ご迷惑をおかけした編集部の方々にも心からお詫び申し上げます。思いを新たに今月号から再開させていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

『教行信証』における〈教↓行↓信↓証〉の構造

これまで四回にわたって、親鸞聖人による『観無量寿経』と『阿弥陀経』の捉え方について解説してきました。そこでは、『観無量寿経』では自力による諸善万行が、『阿弥陀経』

では自力による称名念仏が、それぞれ勧められており、両經に説示される阿弥陀仏や極楽浄土は方便化身・方便化土に留まると主張されていました。だからこそ親鸞聖人は、両經の説示内容を『教行信証』の「化身土文類第六」に配当されたのです。一方、親鸞聖人にとって、『無量寿經』の位置が格別なものであったことが『教行信証』の「教巻・行巻・信巻・証巻」の次の一連の記述によって知られます。

『教行信証』教文類第一「それ真実の教を顕さば、すなはち『大無量寿經』これなり。（中略）如来の本願を説きて經の宗致とす、すなはち仏の名号をもつて經の体とするなり。」（真宗聖典一三五）

（試訳）それ真実の教えを明らかにしているのは『大無量寿經』です。（中略）阿弥陀仏の本願を説くことを『大無量寿經』の肝要・究極とし、阿弥陀仏の名号を『大無量寿經』の本体とするのです。）

まず親鸞聖人は、冒頭の「教巻」において、一切衆生を平等に救済することを眼目とする『大無量寿經』こそ、釈尊出世の本懐としての真実の教であり、阿弥陀仏の本願と阿弥陀仏の名号こそ、『大無量寿經』の中心であると規定します。

『教行信証』行文類第二 標榜の文「諸仏称名の願 浄土真実の行 選択本願の行」（真宗聖典一四〇）

（試訳）あらゆる世界の仏たちがみな阿弥陀仏の名号を讃歎し、称えるようにしたいという誓願（第十七願）。極楽浄土に往生するための真実の行。阿弥陀仏が選び取られ本願に誓われた行。）

次に「行巻」において、第十七・諸仏称名（称揚）の願において誓われた、諸仏が等し

く讃歎されている、真如に適い、無量の徳を具えた名号を大行と位置づけれます。しかし、「行」とはいっても、衆生が名号を称えるという行為に功德を見出すというのではなく、阿弥陀仏によつてすでに成し遂げられた尊い行の功德を名号そのものの中に見出し、それを「浄土真実の行・選択本願の行」と捉えるのです。

『教行信証』信文類第三 標挙の文「至心信樂の願 正定聚の機」（真宗聖典二一〇）
（試訳 すべての衆生がまことの心で浄土往生を願つて念仏を称えたならば、その願いを叶えようという誓願（第十八願）。衆生が不退転の境地に至る。）

さらに「信巻」では、こうした大行としての名号の働きをすべての衆生に知らしめるため、阿弥陀仏が衆生に回向された信を大信と呼びます。そして、この信は第十八・至心信樂（念仏往生）の願に「至心信樂欲生我國」と誓われた心であり、親鸞聖人は、この心を阿弥陀仏の真実の心を本体とし、阿弥陀仏が衆生を浄土に往生させようと招き喚ぶ声であると解釈します。そして、その信心によつて、すべての衆生を「正定聚の機」、すなわち不退転の境地に至らしめると捉えるのです。

『教行信証』証文類第四 標挙の文「必至滅度の願 離思議往生」（真宗聖典三〇六）
（試訳 浄土に往生した衆生を必ず悟りの境地に至らせるようにしたいという誓願（第十一願）。まことに不可思議な往生である。）

最後に「証巻」では、以上のような真実の行（大行）と真実の信（大信）を因として得られる真実の証（果）は、真の浄土に往生することであり、その極楽浄土は完全に煩惱が消滅した無為涅槃界なので速やかに成仏が叶えられ、そのことは第十一・必至滅度の願に誓われていると述べられます。そして、こうした往生の仕方は、はなはだ不可思議なもの

なので「難思議往生」と捉えます。加えて「証巻」では、往生を遂げた衆生は、自由自在に利他行（還相回向）を進めることができると説き、それによって真実の証が完成すると主張します。

このように親鸞聖人は、その主著『教行信証』において、〔教（『大無量寿経』の教え）↓行（名号功德としての大行）↓信（弥陀回向としての大信）↓証（往生成仏という果）〕という流れを提唱し、そこに四十八願から第十七願・第十八願・第十一願という三願を配当して論を展開していきます。こうした論の組み立て方は、曇鸞大師の『往生論註』を大いに参照しているものの、『大無量寿経』を中心に組み立てられた親鸞聖人独自の主張に他ならず、師法然上人の教えとかけ離れていることは明らかです。

『無量寿経』と難思議往生

『大無量寿経』を中心に組み立てられた浄土往生の構造について親鸞聖人は、『浄土三経往生文類』の中で次のようにまとめています。

大経往生といふは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力と申すなり。これすなはち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚の位に住して、かならず真実報土に至る。これは阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆゑに、無上涅槃のさとりをひらく。これを『大経』の宗致とす。このゆゑに大経往生と申す、また難思議往生と申すなり。（真宗聖典六二五）

（試訳 『無量寿経』に説示される往生とは、阿弥陀仏が選択された本願に誓われたものであり、広大な海のごとき不可思議な働きを有する阿弥陀仏の名号の功德を深く信

じ仰いで、疑う心のまったくない他力回向の信心具足による往生です。この往生は、念仏する者を往生させようという第十八・至心信樂の願を因として、第十一・必至滅度の願に誓われた、衆生を必ず悟りに至らせるといふ果をもたらすものです。現世においては不退転の境地に浴して、必ず真実の浄土に至るのです。こうした流れは阿弥陀仏が用意して下さった浄土往生への真実の因に基づくものであり、ひいては、この上ない悟りを開くこととなるのです。これを『無量寿経』の教えの肝要・究極とします。この故に〈大経往生〉といい、また〈難思議往生〉というのです。

このように親鸞聖人は、『無量寿経』の説示に基づく往生とは、第十八・至心信樂の願に説かれる、阿弥陀仏によつて回向された、阿弥陀仏の不可思議な名号の働きを深く信じる信心具足による往生であり、第十一・必至滅度の願にいう、現生において不退転の位に住し、真実報土の往生を遂げる難思議往生であると述べられるのです。

親鸞聖人の思想変遷——三願転入——

『教行信証』『化身土文類第六』において親鸞聖人は、これまで解説してきたような浄土往生の受けとめ方がご自身の信仰遍歴そのものであることを次のように吐露されています。

ここをもつて、愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によりて、久しく万行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る。善本徳本の真門に回入して、ひとへに難思往生の心を発しき。しかるに、いまことに方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。すみやかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す。（真宗聖

典四二（四一三）

（試訳） こうしたわけで、私、愚禿親鸞は、龍樹菩薩や世親菩薩のご解釈を仰ぎ、曇鸞大師や善導大師など祖師のお導きにより、久しくさまざまな善根を修める方便の要門を出て、永く双樹林下往生（観経往生）から離れ、自力によって念仏の功德を積み修める方便の真門に入って、ひとすじに難思往生（小経往生）を願う心を発しました。しかし今、その方便の真門からも出て、大海にも喻えられる選択本願念仏の教えに入る事ができました。速やかに難思往生を願う自力の心を離れ、難思議往生（大経往生）を遂げようと願っています。）

真宗では、第十九願（『観無量寿経』に説示される双樹林下往生、方便要門）から第二十願（『阿弥陀経』に説示される難思議往生、方便真門）へ、さらに第十八願（『大無量寿経』に説示される難思議往生）へと衆生の信仰が進んでいくさまを三願転入と呼んでいます。こうした三願の捉え方について、隆寛律師などの影響を受けていると指摘はあるものの、最終的には親鸞聖人独自の理解であり、やはり法然上人の教えと大きく異なるものであることは言うまでもありません。

（続く）

平成三十年六月二十二日 於増上寺慈雲閣

法然上人鑽仰会 主催●平成三十年

石丸晶子氏講演概録

法然上人と お弟子たち(二)

いしまる あきこ 1935年東京都生まれ。国文学者、文芸評論家。東京大学文学部卒、同大学院人文科学研究所博士課程修了。東京経済大学名誉教授。著書に『面影びとは法然―式子内親王伝』（朝日新聞社）、『歴史に咲いた女たち―源氏の花 平家の花』（廣済堂出版）、『法然の手紙』（人文書院）、『お手紙からみる法然さま』、小説『月影の使者』（上・下）（浄土宗出版）ほか多数。

法然上人の教えは、今でも浄土宗とか浄土真宗と言われるように、南無阿弥陀仏。お念仏が中心です。阿弥陀仏の本願、お念仏によって、死後、極楽浄土に往生できるというみ教えです。

私は仏教学者でも歴史学者でもありませんので、詳しいことは言えないのですが、浄土宗という新しい仏教は、現在鎌倉仏教と言われますが、平安仏教である比叡山の伝教大師最澄の天台宗とか、弘法大師空海の真言宗に対抗し、浄土の教えを新しくお開きになった仏教です。その教えをお説きになった法然上人が生まれ、生き、そして亡くなった時代は、まさに末法の時代でありました。

ここで申しますと、事もなく昨日が終わり、事もなく今日が始まり、明日もずっと将来、事もなく続いていくだろうというような時代には、新しい革命的な教え、民衆を総絡みにして帰依させるような新しい教えは発生しません。昨日も今日も明日も何ということもなく続いていくというような停滞社会では、一八〇度違うような新しい思想、信仰、宗教は起こり難いと思います。けれども法然上人が生まれ育ち、比叡山で修行し、そして山を下りて、やがて浄土宗という新しい教えを聞かれた時代は、受け皿としての社会的条件が揃っていました。

救済を求める人々が、そして人間の生き死について考える社会的基盤、貴族も武士も一般庶民も、人間が死んだあとは一体どうなるのか。こんな無残、残酷な世の中をどう生きていけばいいのかというようなことを考え、救済を求める社会的基盤というものが、法然上人の時代には出揃っていたわけです。

つまり法然上人が生きた時代は、院政末期→源平盛衰→鎌倉幕府成立の大混亂期で、貧窮困苦の者を輩出する社会的背景がありました。

前置きが長くなりましたが、ここでいよいよ本題に入っていきたいとします。法然上人の教えは瞬くうちに、あつと言う間に日本全国に広まったのですが、どうして広まったかと言いますことを、知恩院の伊藤唯眞猊下の『浄土宗の成立と展開』（吉川弘文館）で多くを教えていただきました。

江戸時代以後には檀家制度ができて、あらゆる日本人はどこかのお寺の檀家さんにならなければならなくなりました。しかし、浄土宗が生まれた十二世紀の頃は、檀家制度はありませんから、庶民は野放しになって、それこそ家を失った下層民というか、河原乞食みたいな人が京都でも日本全国どこでもごろごろしていました。

そうすると、そういう人たちを対象にするお坊さんが、平安時代のこの中頃以後、日本に現れるようになります。それが「聖」、その頃、「聖」と呼ばれたお坊さんです。半僧半俗で、特定の寺院は持たずに、高野山とか比叡山の延暦寺とか、一応所属するお寺はあっても、そこにはたまに帰ってくるだけで、自分の一生ほとんどは日本全国を廻る、半僧半俗の聖と言われるお坊さんたちがいたわけです。

そしてこの人たちは、そういう下層民を教えるわけです。

下層民たちにどういう教えを説いたかと言うと、その聖はわかりやすい、浄土の教えを説きました。「南無阿弥陀仏と言え、おまえたちも救われるよ。

比叡山の難しい学問をして法華經を暗記しなくても、南無阿弥陀仏とおまえた
ちが言えれば救われるよ」という教えを民間の人たちに説いた、聖という人がた
くさんいたのです。

こういう状況の中で、法然上人はそれまで長い、二十五年にわたる、まことの
教え、真理を求めてのうめき苦しむ長い長い時間があったのですが、一一七
五年に実存覚醒というか、浄土の教えこそが万民に開かれた仏の教えであるとい
うことを確信して、比叡山を下りて、民衆に教えを説かれ始めたのです。そ
こで、法然上人が一体どこをねぐらにして、生きておられたのかということが
疑問になってきます。

比叡山におられるときは、寝るところもあるし、お食事にも困ることは一応
ないわけです。ところが、山を下りたら、ご自分で、それこそ自炊して、ねぐ
らを探さなければいけないではないですか。そういう具体的なことがまず必要
になってきます。

ここで私が思うのは、法然上人が比叡山にいたときに、一回り年下の弟弟子
として信空という人がいたことです。

この信空は、一族一門に平家とばつしり関わっていました。

「平家にあらざんば人にあらざ」という言葉をつかったことで有名な平時忠が
います。

清盛がナンバーワンに対して、ナンバーツーであるのが時忠で、清盛の義弟
です。そして信空という法然の弟弟子の叔母さんが、平時忠の後妻でした。領

子（リョウシ）という人で、ものすごく勝気で政治的手腕があつて、すごくやり手の女性でした。平家のナンバーツの実力者である時忠の奥さん領子は、その頃、後白河法皇の朝廷と言えば、平家で占められていて、後白河法皇最愛のお妃様が平時忠の妹、建春門院平滋子でした。それで平家が都落ちする以前の、平安時代の京都は、朝廷というものは平氏の朝廷であつたとさえ言えます。そうすると、領子という時忠の奥さんは、自分の子供たちを全部、天皇とか、建礼門院とか、安徳天皇とか、高倉天皇とか、そういう方たちの乳母に差し出していました。それで信空の親類縁者を調べていくと、がっちり時の朝廷と縁戚関係があつたことが分かります。

法然上人が比叡山を下りられたときから、宿無しで、お食事をどうするのということになりますけれども、山を下りられたときに既に弟弟子として信空がいましたから、まだ平家は都落ち以前で、平清盛も生きていて絶頂期でしたから、信空は「私の兄弟子が比叡山を下りて京都の街中に行きますので、（実存覚醒という言葉はお使いにならなかつたと思うけれども）、天台の教えに飽き足らずに、長い間苦しみ抜かれた末に新しい浄土の教えを確信されました。京都の街中に下りられますので、よろしくご支援ください」と言つたに違いないと私は思います。

「平家物語」を見てまいりますと、平家の万々歳の時代にあつて、この浄土の教えが平家の人々の間にも広がつていったことがわかります。例えば、平清盛の跡取り、長男、嫡男である平重盛がいます。「君に忠ならんと欲せば孝ならず、

孝ならんと欲せば忠ならず」という言葉で有名な方ですが、早死しました。法然上人が比叡山を下りられたのが一一七五年と言われています。それから四年後の一一七九年十月に重盛は亡くなります。この重盛は生きているときに浄土の教えに深く帰依して、四十八の浄土の教えに通底する四十八の灯籠を付けて、そこに四十八人の美女を侍らせて、大念仏会を開いたと平家物語に書かれています。

私も法然上人が山を下りられた直後から、いや山にご滞在中であつたときも、平家が経済的にも援助していたのではないかと思います。

それは「平家物語」等には書かれているけれども、浄土宗側の資料には法然上人と平家について書かれたものは少ないです。

それはなぜかと言うと、このときはもう源氏の時代ですから、法然上人のいろいろな伝記とかを世に著すときに、平家と法然上人との関係を書くことははばからなければならない時代だつたからだと思います。

ただ、平家が都落ちして、あとに続いて義仲が大軍を率いて、京都になだれ込んできます。その木曾義仲が京都に乱入したその一日だけ、法然上人は浄土の経文を開かなかつたと伝記には書かれています。この当時、京都の人口は十二万人であつたと言いますから、そこに五万騎の義仲軍が乱入してきて、もう大変な騒ぎでした。

恐らくは法然上人と平家との深い関わりがあつたので、押し寄せてきた木曾義仲の大軍は、平家の公達たちが法然上人の庵に、今の知恩院のあたりに隠れ

ているだろう、あるいは法然上人が平家の残党を隠しているだろうと疑って、一日中見張りをしていたので、法然上人はその日一日だけ、み教えを紐解くことができなかったのだろうと思います。

まず平家の保護があつた。それは経済的に支援されるとともに、その教えがいち早く平家を通して時の朝廷の方々、貴族たち、言ってみれば、そのときの朝廷は、安徳天皇は幼子ですから、お母さんの建礼門院とか、そのほか宮廷の女性たちに伝っていきました。

それから貴族社会。貴族社会と言っても、「源氏物語」が書かれていた頃は摂関政治の時代ですから、藤原本家が実力ナンバーワンでした。しかし法然上人が教えを述べ伝えられていた頃は、後白河法皇とか、天皇様ではなくて天皇のお父さんとかおじいさん、そういう上皇とか院が天皇よりも政治の実権を握っていた時代です。

今度、今の平成天皇が退かれるでしょう。今の皇太子様が天皇になられるわけですが、そういう意味で権威の二重構造が発生しないように、平成天皇は非常に心配りをされて、退位されたあとは、宮廷儀式、例えば、歌会始とかお正月の儀式には出ていらつしやらない予定だそうです。権威が天皇と上皇と二つになるといけないと心配されているということが、今までたびたびマスコミに報道されていました。

この平安末期の時代は、白河院、後白河院という人が権力を握って、この院の手足になって働いていたのは、摂関時代の上級貴族ではなくて、中流・下級

貴族の人たちでした。

そうすると、法然上人のみ教えは信空という弟子を通してまず平家へ、そして平家を通して宮廷社会へ、そして宮廷社会を通して中下級貴族へ。院の近臣として待っている中下級貴族は、自分の娘たちをたくさん宮中に、まさか皇后とかお妃さまにはなれないけれども、その人たちにお仕えする乳母とか侍女とかに送り込んでいましたから、その乳母とか侍女を通して、法然上人のみ教えは宮中にしつかり広まっていたと思います。

法然上人の新しい浄土の教えは、平家を通していち早く京都の公家、宮中の女性たちに伝わるとともに、全国廻遊の聖という人たちに伝わりました。

この聖たちは、法然という偉いお坊さんが比叡山から下りて、新しい浄土の教えを広められた、それは私たち、俺たちが今まで庶民に説いてきた教えと非常にマッチするのではないかということ、そういう人たちが多数集まってきました。

一番初め、法然上人が今の知恩院のあたりで、平家の補助を受けながら小さな草庵を結び、そこで一般庶民に向けての教えを説かれ始めます。

次に、弟弟子の信空を通して、法然上人の教えは一般庶民だけではなく、いち早く平家を通して宮中の人々、宮中の女官たちにも広がったと思います。

それとともに、上人の許には、今申しましたような聖たちも、自分たちの今まで説いてきた南無阿弥陀仏の教えを、比叡山から下りた偉いお坊さん、法然という人が説き出しているらしい、大変なものらしいというわけで、京都は全

国廻遊の聖たちにとっても一つの集合場所でしたから、聖という人たちが集まっています。

そうすると、この聖という人は自分たちの直弟子も持っています。そんな聖たちは時々法然上人の教えに触れ、また再び自分が持っている十人、二十人のお弟子さんたちを連れ全国廻遊して。その人たちにも法然の教えを伝えるわけです。そういうことが幾つも幾つもあって、法然上人の教えは時代が要求する教えとして、あつと言う間に全国各地に爆発的に広がってゆきました。

また、法然様の教えが広く聖の世界にも知られるきっかけになった一因に、「大原問答」というのがあります。今、大原と言うと、その近くに建礼門院で有名な寂光院があります。法然様の説いた新しい念仏の教えというのが、やがて比叡山の座主、比叡山のトップの方にも知られるようになり、では、天台、法華の教えと法然様が説く浄土の教えのどちらが優れているかというわけで、たくさん僧侶を集めて、大原で問答が行われました。

そして問答は、法然上人の念仏の教えが勝ったのです。このときの比叡山の天台座主は、碁や将棋のように「負けました」ということになって、天台座主もひたすら南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と法を説くようになったということが知られています。

この大原問答に参加したのが、平家に焼き討ちされた東大寺を再興したことで名高い重源ちゅうげんで、この重源も全国を廻遊する念仏聖でした。重源が自分のお弟子さんたち二十人ぐらいを連れて大原問答に参加します。重源もその様子の一

部始終を見、そして天台座主さえも負けたということで、いち早く都の人々、そして聖集団にも伝わってゆきます。そして以後、都の高級貴族の中にも知れわたっていくようになります。

このときの大原問答について、法然上人はこのように述懐されています。

「どっちがどっちとも言えないけれども、悟りの深さにおいて、私の言葉を使うと、実存覚醒。どれだけ深くその教えを自分のものになっているか。受け売りとか、頭の上の勉強ではなくて、どれだけ深く自分のものになっているのかという点において、天台座主よりもわたしは優っていた」とおっしゃっています。頭の上の理解か、心の底からわかっているかということの違いであったと述懐されています。

こうして法然上人の教えは平家を通して宮中へ、中下級の貴族へ、大原問答以後は高級貴族の間へ、そして聖集団を通して下層民たちへ、あらゆる社会の人々に伝達されてゆきました。

(つづく)

※この稿の「聖集団」に関しては、伊藤唯眞猊下の『浄土宗の成立と展開』（吉川弘文館）のご教示に拠りました。

第二十七回

江戸の川 を歩く

江戸ウォーカー

森
清鑑

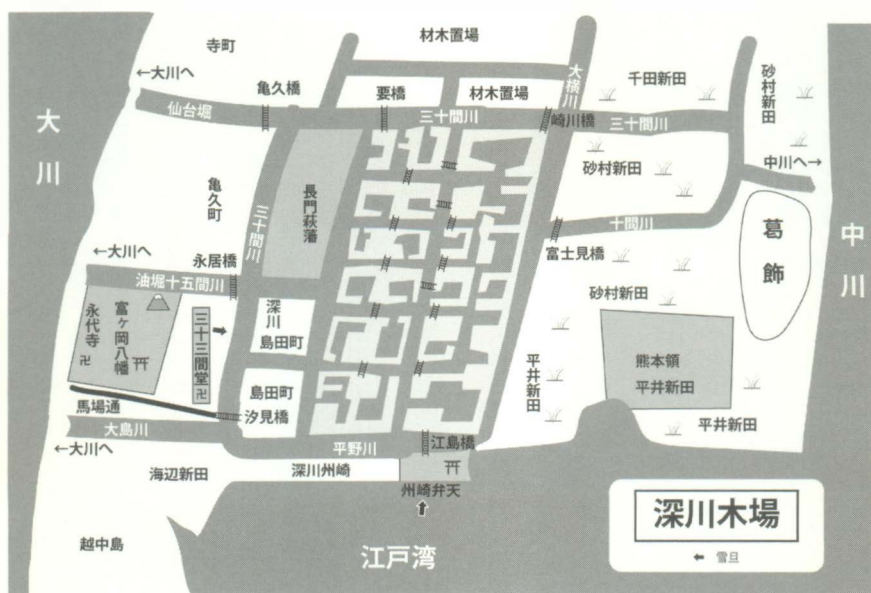
深川木場

富岡八幡に参拝し、隣の三十三間堂を見る。参道は東側にあり、後ろを振り返ると三十間川の茫洋とした流れに材木を組んだ筏。川並(材木職人)が竿を立て、器用に操っている。これを渡ると左右は島。深川島田町。入り船橋を渡る。目の前に美しい島が寄せ集まったような感じの広大な木場が展開する。

今度は、大川から油堀に入る。そのまま東に直進。やがて広大な永代寺に出る。右側に永代寺や富ヶ岡八幡の社が見える。そして永居橋を渡ると三十間川。突っ切って行くといつの間にか木場に突入している。

さらに大川から仙台堀に入る。東に向かう。海辺橋、亀久橋を渡り、要橋に。すると右側全部が深川木場である。このように全ての河川が材木運搬路であることを実感する。

いくつかの大火を経て、元禄十四年(一七〇二)



幕府は材木置き場を永代島の隣に移すことを決断。九万坪に多数の島を浮かべ、しかも全体を鳥瞰するときつちりとした縦長方形の区画を造る。見事な設計思想が伺える。

広重の絵を見てみよう。雪降りしきる深川木場である。雪を被った木々が立ち、水に浮かぶ無数の材木。簀を被った職人、川並がその上に乗り、作業。小島には、これまた無数の材木が立てかけられており、広重は絵の左、前面にこれを強調している。小島と小島を結ぶ橋が遠くに見え、空には野鳥が飛ぶ。広重は木場のどこを描いたのか分からぬが、いたるところ、このような光景であり木場を象徴している。

雪旦の深川木場絵図は、これを鳥瞰的に捉え、全体の雰囲気の手取るように分かる。絵の下半分の小島には松の太木が並び、川柳が聳え、豪壮な家宅が並ぶ。座敷に人が集まり商談だろうか、辺りの広々とした水と木々の何とも言えぬ、のどかで開放感のある景色を愛でているのであろうか、正に水の観光地の感。この小島にも材木が積み重

ねられていたり、原始時代の家の形に組み立っていたり、横倒しに置かれている。豪商の別荘の感。小島の周囲には土留め柵が巡らされている。その上の流れには、材木筏を操って運ぶ川並の姿。作業する際の掛け声が木遣り歌。観光船とおぼしき舟。小舟を繰り出し釣り糸をたれている者の姿が見られ、頭上には野鳥が飛び交っている。向かいの小島は家が八軒寄り添っている。小島と小島の間はアーチ型の橋が架かっており、人々が渡つ

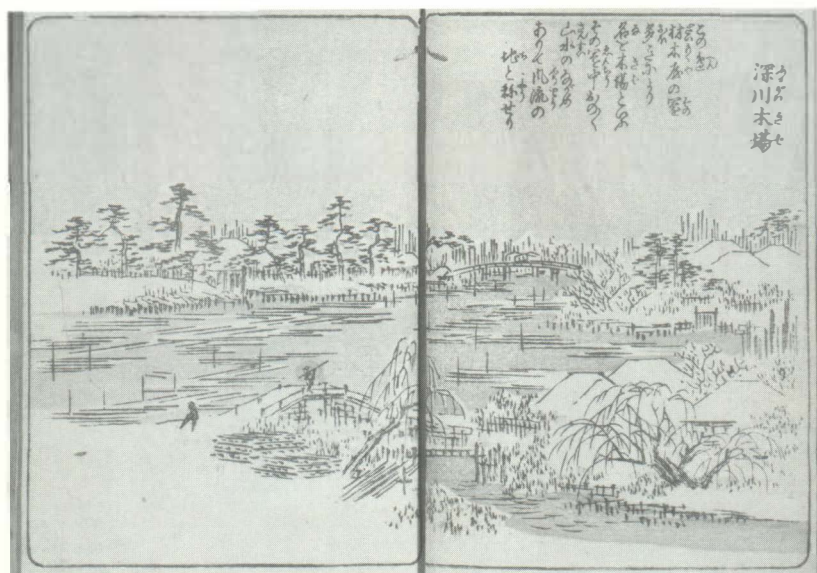


広重：深川木場：雪景色

ている。絵の下には、材木に乗り長い棒の先に刃物がついた鷹口を巧みに操っている川並（かわなみ。筏師の事）。彼らの木遣りの声が聞こえるようだ。木場は、こうした専門職や角乗り曲芸という見世物を創出した。絵では、筏師の向かいに、筏の先端部に立って、暢気に釣を楽しんでいる者が数名、長い釣り竿を肩担いで橋を渡っている者等が描かれており、どうやら木場は有力な釣り場だったようだ。

中央右の小島には馬場のような広い道があり人々が散策している。天秤棒を担いだ、「ぼてふり」らしき姿もあちこちに見かける。風光明媚な、水の都といったこの感じは、殺風景な材木置き場という予想を完全に覆すものである。絵本「江戸土産」には、「この辺り、材木屋の園、多きにより名を木場という。この園中、おのおの山水の眺めありて、風流の地と称せり」と書かれている。

江戸で使われる材木のほぼ全てを木場の材木問屋の組合が管理することになり、巨万の富を築く材木商が出現する。紀伊国屋文左衛門、奈良屋茂



広重：絵本江戸土産：深川木場

左右衛門が代表格。彼ら豪商が、莫大な金をつぎ込んで永代寺門前町の料亭で接待するので、深川花柳界の隆盛をもたらした。紀伊国屋文左衛門は、深川木場に別荘のような豪邸を構えており、その一方で、富ヶ丘八幡宮に大御輿を寄進したり、永代橋造営にも貢献している。豪快な人物である。かくて、材木商は、呉服商、両替商と並ぶ江戸の花形商人となり、その象徴が深川木場である。

州崎弁財天社

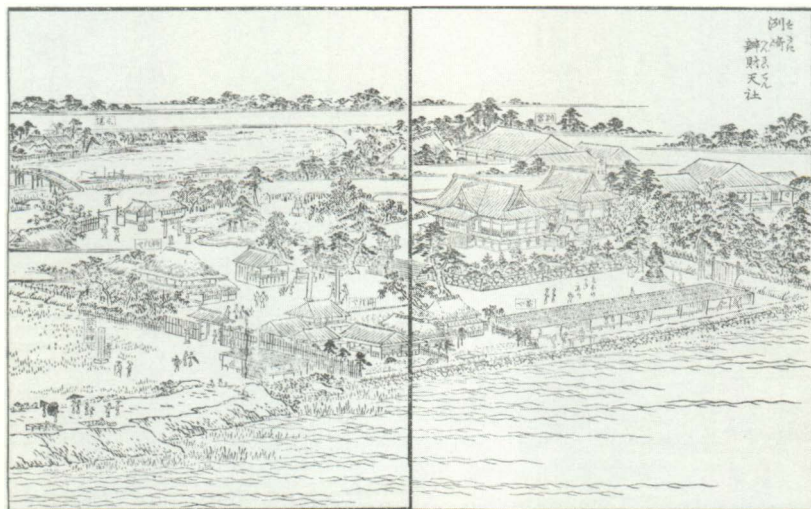
木場の南底を流れているのが、大島川の延長、平野川。そこに架かっているのが江島橋。渡ると州崎弁財天社。木戸門を潜る。料理屋の前を通り、左に見る、鳥居を潜ると立派な社が建っている。五代將軍綱吉の母、桂昌院が江戸城、紅葉山の弁財天を遷座して創建。深川州崎十万坪の東端にあり、大勢の参拝客がこの土手道を歩いて柵門（正門）に入る。両側に立派な料理屋。正面に鳥居と本堂。右手の広場には、長い葦簀張りの茶屋。参拝客は



雪旦：深川木場：鳥瞰図

ここに座って目の前の海を眺める。絶景。富士山、遠くに三浦半島。目の前に押し寄せる波。夜ともなれば月見の名所。夏は潮干狩り。都鳥が飛び交い、野鳥の宝庫。無論、魚釣りのメッカ。文人墨客の集まるところ。江戸っ子はこぞって州崎弁天を訪れた。

深川木場を過ぎると周囲の環境はがらりと変わってくる。中川に至まで新田、田や畑一色。木場周辺の三十間川や十間川等からの細流が広大な田畑を縦横に走り、中川まで続く。地名も深川から葛飾へと変わる。



雪旦：江戸名所図会 州崎弁財天社：押し寄せる波、左下、州崎を通り、弁天社にぞくぞく参詣客。左上、木場、平野川、江島橋を渡って弁天社に。茶店や料理屋があり、江戸庶民憩いの場所。

微

風

吹

動

石田 一裕

最北の風と西方の風

風が吹いている 僕はここで生きて行く

いきものがかり「風が吹いている」より

北緯四十五度三十一分二十二秒。日本の北の果てに宗谷岬がある。宗谷丘陵と呼ばれるならかな丘陵地帯が海めがけて落ち込むような地形が続き、その地に暮らす人々は海と丘陵の間のわずかな平地に居を構え、漁業を生業として、風とともに生活をしている。一年を通して吹き続ける風の平均風速は七メートルを超え、宗谷丘陵にはその風を受けて勢いよく回る風車が連なっている。日々吹き付ける風を活かして作られた日本最大級の風力発電所が稼働しているのだ。丘陵を吹き抜ける強風を受けた風車は、風を電力へと変換する。それは人口四万人に満たない最北の市にとって十二分な量となっている。風は人々の生活に恩恵を与えているのである。

この宗谷岬の近くに、といっても一〇キロメートルほどの距離があるが、護国寺という浄土宗寺院がある。安政年間（一八五五―一八六〇）に建てられた日本最北の浄土宗寺院であり、その存在は日本の北端まで念仏の教えが届いたことを証明するものである。建立当初は北海道の厳しい環境の中で命尽きた人々を供養し、また現在でも江戸の晩年に北方警備の任に当たった会津藩や津輕藩の藩士を供養し続けている。

私はこの寺に生まれ育ち、青春時代を送った。幼い頃は風力発電所がまだ建設されていなかった。そのため風は恵みというよりも、

自然からの挑戦状であった。夏は自転車で通学をしていたが、強い向かい風の時にはペダルを踏み込んでもなかなか前に進むことができなかった。真冬の通学では吹雪が容赦なく視界を奪い行く手を阻み、氷点下の中で吹き付ける強風は、しばしばまづげを凍りつかせた。風がなければどんなに生活が楽だろうと感じたものである。おそらくこの地で亡くなった旧藩士たちも同じ思いを抱いていただろう。

高校を卒業し、横浜の寺で小僧としての修行が始まるとともに、僧侶となるための学問を修めるために大学にも通い始めた。生まれ育った北海道を離れた生活は、水平線の見えない生活であり、異なる風を感じる生活であった。初めて異なる風に出会い、風に肌触りや匂いがあることを知ったのだ。そんな体験を通じて風はただの大気の動きではなく、その土地の歴史やそこに住む人々の作り出す空気の蠢きなのだ、と理解したのである。それと同時に、ここで生きて行く、という思いが湧きあがったのである。

その土地の気候や環境を「風土」といい、また古くからの習わしを「風習」と呼ぶ。人は土地の特徴をそこに吹く風の中に見出し、そこに住んできた人々の歴史をその風から感じ取る。新しい風に出会うと私たちが戸惑うのは、その風が今まで知らなかった自分の一

面を揺らすからであらう。そう、新しい風を通じて、人は新しい自分と出会うのだ。

西方十万億土。三千大千世界の西の果てに極楽浄土がある。阿彌陀仏と呼ばれる仏が在しますその浄土は、この世の苦しみを離れた安楽に満ち満ちた場所であり、私たちがいつか旅立つ世界である。そこに暮らすものたちはこの世のしがらみから解き放たれ、仏道修行に勤しんでいる。そこにも風が吹くという。それは微風であるが、木々の間を吹き抜けると、美しい音色が響きわたる。その音色は仏の教えであり、それを聞くことで敬虔な思いが湧きあがってくる。極楽の風はそこに暮らすものたちに恩恵を与えているのである。極楽の風は、最北に吹く私たちの行く手を阻むような強風ではなく、心地よく吹き付けるそよ風である。きっと、初めて極楽の風に吹かれた時には、新たな道を生きて行くという思いが定まるのであらう。さて、これから微風吹動と題した連載を、三人の僧侶が順番に綴っていく。それぞれ異なる風を吹かせてゆくことになる。それは極楽浄土に吹く微かだけれど心地よい風とまではいかないが、あなたの心に届く確かな風となることを目標に、言の葉を連ねていこう。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十四回

第三部

充実と稔りの白秋へ

米高騰と宗教大学生



宗大生の赤手空拳の快拳

渡辺海旭が浄土宗労働共済会を立ち上げた翌年の明治四十五年、同会宿泊施設の近傍の洲崎で大火が発生、そこへ米価高騰が追い打ちをかけ、海旭渾身の細民支援活動の真価がさつそく試されることになった。

海旭は労働共済会の活動をフル回転させて細民支援に没入するいっぽうで、主筆をつとめる宗門機関紙「浄土教報」で、同朋にこう檄を飛ばして「援護」を懇請した。

「都門の寺院諸師此危機に^{あた}下り、少くとも^{ぼん}盆供施^{くせが}餓鬼の供米一袋二袋を^{りん}投ずるに吝^ななる勿れ、活施餓鬼を行ふ今日より急なるはなし」
〔活施餓鬼を修すべし〕明治四十五年七月十五日、第一〇一六号）

この檄文は裏を返せば、宗門の動きの鈍さに対する海旭の苛立ちを示していた。そんななかで、海旭の面目をいくらかなりともほど

こしてくれたのは、帰国後、教鞭をとっていた宗教大学（現・大正大学）の教え子たちの活動だった。同じ檄文の中で、それを引いて、海旭は宗門の寺院に重ねて「援護」を懇請した。

「増上寺及都門二三の有力者を後援としたる。宗教大学の学生は今や起てり、彼等青年純潔熱烈の精神、此危機に激せられて、赤手空拳猛然として起てる也、嗚呼、惨状は真に既に前に至れり、教家今に至りて猶ほ袖手座視せむや、夫世^よが卿等が冷酷無情に対する深酷の批判を如何せむとする、奮起せよ、都門の寺院諸氏、卿等豈^{あに}無資無力の学生に劣る所あり、而して何の面目ありて卿等の檀信^{まみ}に見へんとする」（前掲同上）

この海旭が称揚してやまない「宗大生の赤手空拳の快拳」には、実は海旭自身が深くかわっていた、と思われる。「と思われる」と記したのは、それを裏付ける確たる資料がないからだ、例によって筆者が妄想を大い

に遅くして、「外米販売による細民救済」の「あらまほしきドラマ」の再現を以下にこころみてみよう。

試験ボイコットから細民救済へ

明治四十五年六月某日の夜半、場所は通り一つ隔てていたがゆえに洲崎大火の類焼をまぬがれた海旭が住職をとつめる深川西光寺の庫裏。折しもそこでは、西光寺の寄宿生四人によって「謀議」が凝らされていた。

海旭はドイツから帰国すると、多くの苦学生たちを寺に引き取っては面倒をみていた。それは昭和六年に急逝するまでつづき、彼らの所属は東京帝大（現・東京大学）から東京専門学校（現・早稲田大学）、芝中学など多岐にわたり、その数は常時十人を超えていた。食費など寄宿費をとらなかつただけではない。海旭遷化のあと、これらの学校当局から西光寺へ授業料支払いの督促で明らかになったが、海旭は親の倒産などで困窮した寄宿生の学費

の支援までしていたのである。

このとき「謀議」を凝らしていたのは、いずれも宗教大学の寄宿生であつた。その中心人物は長谷川良信。明治二十三年茨城県南山内村（現笠間市）に士族の五男に生まれ、近傍の浄土宗の寺に養子として入り、地元の小学校卒業後、海旭の母校でもある芝中学を経て、帰国直後に海旭が教鞭をとり始めた宗教大学に入学したばかりであつた。なお、良信は海旭の薫陶をうけて、セツルメントなど困窮者支援に生涯を捧げ、淑徳学園の前身である「マハヤナ学園」を設立、後に、貧民街の聖者、賀川豊彦、日本福祉大の創設者・鈴木修学とならんで日本の三大社会事業家と呼ばれることになる。

長谷川良信はこの夕刻に招集をかけた同級生に、こう呼びかけた。

「諸君、来週からは期末試験だが、これをボイコットしようではないか」

「異議なし！」と残りの三人が賛同した。

事の発端は、この年に制度化された「専門学校令」により、それまでの宗教大学京都分校が「仏教専門学校」として分離独立、そのあたりをうけ一部の学生や関係者が転学させられることになったのである。それに疑念をいだいた長谷川たちは学校当局に説明を求めたが、明解な回答は得られなかった。その背景には、宗門内の東京・増上寺派と京都・知恩院派の覇権争いがあるのではないかと想像させた。

この「謀議」はやがて海旭の耳に届くこととなり、長谷川らと話しあいをもった海旭は彼らの疑念と決意に海旭は理解を示した。帰国したばかりで宗門内部の派閥抗争にはまったく蚊帳の外にあったが、いや逆にあったからこそ海旭には教え子たちに共感を禁じえなかった。さしずめ現在というなら説明責任と情報公開とガバナンスの欠如・不在である。

海旭は大学当局の不透明感に疑念をおぼえながら教え子たちに言った。

「き、きみたちの決意やよし、だ。しかし、どうだろう、試験を放棄するだけでは私憤の表明にすぎないと受け取られかねぬ。これが諸君らの私憤ではなく公憤であることを身をもって内外に示すべきでないか」

「渡辺先生。何かいい考えがあったらご教示ください」と寄宿生の一人が訊き返した。

「そ、それはきみたち自身で考えたまえ」

と海旭はあえて突き放した。

上から指示をしたりはしない、示唆は与えるがあくまでも生徒たちの自主性に委ね彼ら自身に考えさせる。それが当時もその後も海旭の教育信念で、それを理念化・標語化したものが、亡くなるまで校長をつとめた芝中学の校訓「遵法自治」であった。

三千人の困窮者に米の大廉売

日を改めて四人で鳩首協議するなかで、長谷川が提案した。

「そうだ、目下の米高騰に苦しむ細民たちの

ために、安く米を売ろうじゃないか」

全員、海旭の労働共済会を手伝うなかで細民の苦しみはひしひしと感じていた。

「それはいい考えだ。でも、米を仕入れるには金がある。さて、どうするかだ」

と問いかける仲間に、長谷川は全員に呼びかけた。

「みんな、この夏季休暇にそれぞれの故郷に帰って、檀家に趣旨を説明して喜捨を求めようじゃないか」

これで衆議一決した長谷川たちは、さっそくキャンパスで「帰省喜捨行脚」を訴え「同志」を募った。それは期待以上の成果をあげた。それぞれの帰省先の篤志家から寄せられた浄財は少額ではあったが、この動きが宗門中枢に伝えられると、宗門を上げて支援しようという動きが澎湃としておこり、多額の寄付金が出されたのである。実はこの背後には海旭の働き掛けがあったことはいまでもなかった。

これに勢いを得た長谷川たちは、困窮者地

区に入って実情をつぶさに踏査、また売り惜しみをしている米屋の実態も調べあげ、そうした状況のなかでも、どうすればどれぐらいの量の米を確保できるかを試算、その中で食味や値段などを勘案して、中国の南京米とビルマのラングーン米が「最適解」であると割り出した。後は実行あるのみだった。

その報告を受けた海旭は、二十歳たらずの若者たちがたった二か月ほどでこれほどまでに成長するものかと驚くとともに大いによろんだ。そして、「良心的な米穀商」を紹介するなどして陰ながら応援をつづけた。

かくして、七月中旬、三回にわたって、回国回向院、新宿の大宗寺、小石川の伝通院の三寺の境内で、順次、困窮細民に向け「米の大安売り」が実施されることになった。今や一升二十四、五銭にまで値上がりしている米が、救世軍よりも二銭も安い十六銭で販売されるというので、連日、各門前は長蛇の市をなす「盛況」がつづいた。

販売対象は実にのべ三千人（一人三升まで）にのぼった。そして収支だが、以下のとおりこれも驚異的な数字であった。

まず「支出」だが、米の買い入れと経費をふくんで千二百三十六円六十三銭五厘。いっぽう米の販売収入は九百三十八円二十銭。差し引き約三百円の「持ち出し」であるが、これを補ったのが上記の篤志家の「喜捨」と宗門からの「寄付」、そして「同情箱」と「同情券」であった。この二つの策は学生たちのアイデアで、会場の寺院に設けられた「カンパ入れ」が「同情箱」、定額カンパ金額を記入したものを購入してもらうのが「同情券」、まさに貧者の一灯であった。ちなみに「同情箱」の総額は十七円十八銭五厘、「同情券」のそれは十三円六十五銭。また寄付金は、増上寺三十円、浄土宗宗務所五十円、その他篤志家からが二百十九円三十銭であった。

以上、収支を総決算すると、総支出千二百三十六円六十三銭五厘に対して総収入は千二

百六十八円三十三銭五厘で、しめて三十一円七十銭の「黒字」となった。

金額面からみても、これは尋常ならざる社会事業イベントであった。

ちなみに、米一升（十キロ）の価格で比較すると、このイベントの二年前の明治四十三年は十三銭、二〇一五年は三千九百四十六円で約三万倍。また「給与所得者年収」で比較すると、明治四十三年の三百四十六円に対して二〇一五年のそれは四百二十万円、約一万二千倍にあたる。したがって、現在の金額に換算すると、支出金額は約千七百万〜三千七百万円。「持ち出し」とそれを補った篤志の喜捨は約四百〜九百万円になる。

二十歳になるかならないかの大学一年生二十余人がわずか二か月でこれを為しえたことは端倪すべからざることであり、師の海旭も教え子の壮挙に望外の驚きと喜びを禁じ得なかった。

（つづく）

仏教コラム

佐々木美冬

前回、揭示伝道に注目して書いたが、世の中間じょうなことを考える人たちも多いようで、仏教伝道協会は「輝け！お寺の揭示板大賞」と号して大々的に写真を集めたいらしい。大賞は岐阜県の願蓮寺さんの揭示板で「おまえも死ぬぞ・釈尊」であったという。投稿者のコメントには「生も死も同等にあること、特別なことではなく当たり前の感覚として、自分に染み込ませたいです」とある。なるほどインパクトの強さはある。伝道協会賞は「つくられた幸せでインスタ疲れ、本当の幸せは写真映えない日常の温かさの中に光っている」（京都府佛光寺）。こちらは時代性を取り入れた感覚。中外日報賞は「大丈夫だよ、生きていけるよ」（東京都正徳寺）。こちらはふんわりと柔らかい。ほかには「本当に神仏を拝んでいますか。欲望を拝んではいませんか」（香川県清立寺）、「行き先をググれば行き

方がわかる。行き先を念ずれば生き方がわかる」「ほとけさま、ごせんぞさま、おてんとさま、おたがいさま、おかげさま」（広島市超覺寺）。「腹が立つ時ブツブツ申せ、ブツはブツでもナムアマミダブツ」（東京都大秀寺）。「お寺の前に、初心^{はつしん}をお忘れの方がおられます。お心あたりの方はぜひお寺にお参りください」（福岡永明寺）。「NO・御先祖 NO・LIFE」（京都府龍岸寺）。「君たちがいて僕がいる・チャーリー浜」（香川県一心寺）等々。

お住持のセンスか、あるいは若さんの担当か。みな、なかなか凝っている。

かつて浄土宗出版室で『街を照らす千の言葉』という揭示伝道用の言葉を集めた本を作ったことがあったが、もう一度出すなら、これらを入れたいものである。



謹 賀 新 年

平成三十一年

浄土宗総本山知恩院門跡
浄土門主

伊 藤 唯 眞

大本山 増上寺
法主

八 木 季 生

大本山くろ谷金戒光明寺
法主

高 橋 弘 次

大本山 百萬遍知恩寺
法主

福 原 隆 善

〒606-8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山清浄華院
法主

真 野 龍 海

大本山善導寺
法主

阿 川 文 正

大本山光明寺
法主

柴 田 哲 彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (二二) 〇六〇三

大本山善光寺大本願
法主

鷹 司 誓 玉

〒380-0851長野市元善町五〇〇

謹賀新年

平成三十一年

浄土宗宗務総長

豊岡 鏖 尔

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

美作 誕生寺

〒709-3602 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
T E X T 〇 八 (七二八) 二一〇二
F A 〇 八 (七二八) 二一六二

(学)大乗淑徳
理事長 学園

長谷川 匡俊

〒174-8645 東京都板橋区前野町 五・五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳S C 中等部高等部

理事長
校長 麻生 諦善

白本尊阿弥陀如来・
家康公念持佛

静岡 宝台院

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貫

〒107-0052 東京都港区赤坂四 三・五

鶏頭山安楽寺

飯田 實雄

〒399-4115 胸ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五(八三)一三六〇

清水湊

忠高山 實相寺

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山 傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

家康公祖母菩提所

玉桂山 華陽院

住職 堀田卓文

勝願寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区遠阪二・八・六九
電話〇六(六七七二)〇四四四

謹賀新年

平成三十一年

九品阿彌陀如来

淨眞寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七、四二、三
住職 清水英碩

宮城県仙台市

じょうぎ
定義如来 西方寺

住職 大江田 紘義
前住職 大江田 博導

岩淵

天王山 正光寺

〒115-0041 東京都北区岩淵
町三十一、十一

無縁寺

回向院

〒130-0006 東京都墨田区両国二、八、十
電話〇三（三六三四）七七七六

投込寺 淨閑寺

戸松秀明

〒116-0003 荒川区南千住二、一、一三

古今伝授の寺

天主君山 願成寺

〒411-0022 静岡県三島市川原屋敷久
住職
メールマガジン ganjoji.com

塩竈市 雲上寺

東海林良雲

五劫山

愚鈍院

〒984-0051 仙台市若林区新寺二、十二、十七

寿 福山 寛慶寺

水科善隆

〒380-0852 長野県長野市東之町四〇六番地
電話〇二五（三三三）一八一二

大 吉寺 職

成田昌憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四、七、九

梅窓院 住職

中島真成

東京都港区南青山
2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」
住職 飯島英徳

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143) 22・4677・44・2695

謹 賀 新 年

平成三十一年

護念山 称名寺

須藤隆仙

〒040-0055 北海道南館市船見町十八番十四号
電話 〇一三八(二三)〇五七四

浄土宗東京教区
教区長

高橋誠実

無量寺
〒158-0097 世田谷区用賀四、二十一

浄土宗東京教区教化団団長
浄心寺住職

佐藤雅彦

〒113-0023 文京区向丘
二、一七、四

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四、二、二八
電話 〇四六七(二二)〇七〇三
FAX 〇四六七(二二)五〇五一

吞龍上人縁日(毎月八日)
埼玉県佛教会副会長

蓮馨寺

住職 糸原恒久
〒350-0066 川越市連雀町七、一
電話 〇四九(二二)〇〇四三
FAX 〇四九(二二)〇六七六

浄土宗東京教区教区議
議長

村山好信

良信院
〒135-0022 江東区三好三、七、五

願行寺

佐藤成順

〒140-0004 品川区南品川二、一、二二

光円寺住職

佐藤良純

文
〒112-0002 京区小石川
四、二二、八

森巖寺

加藤昌康

〒155-0032 世田谷区代沢三、二七、一

若水を捧げるころ燈が点る

岱潤

「かなしみの片手ひらいて渡り鳥」先日新聞にA Iと俳人が句会をやったところ、最優秀句は冒頭の句で、A Iが作った句がとり、「詠み人おらず」となっていた。何とも笑える話だが、A Iは膨大な俳句の手法を学び、約三万句を読み込んで、一秒に四十句を作るといふ。

最近のA I（人工頭脳）の発達はじめまぐろしく、中国ではそのストリートな発言に、苦渋しているという。例えば「中国の夢は何ですか」と質問したところ、「アメリカへの移住です」と答えて

しまった。即座にA I対話サービスは閉鎖されてしまったらしい。

日本でもA Iに「高齢者の健康を守るための具体策は」と質問したところ、「病院を減らせ」と答えたそうだ。これはA Iが財政破たんし病院をなくした夕張市で、人々が健康づくりに取り組み成功したことを知っているからだそうだ。また今まで男性ばかりの職場に女性を採用することにしたのに、その書類審査をA Iに任せたところ、女性の採用がなかったという、過去のデータを基にすると、そうなるのが機械の宿命だ。

どれほどA Iが優れていても、任せていいことと、悪いことがあるはずだ。何

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 鹿谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森厳寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光園寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 成田昌憲(世田谷・大古寺)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 松濤泰彦(芝・寶松院)
 真野龍海(大木山・清浄華院)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
 メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

も俳句を作ってもらわなくてもいいような気がする。人間の楽しみまで機械に奪われたらさみしくなってしまう。

新しき年、せめて人間らしく生きたい。

(長)

編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

浄土

八十五巻 一月号 頒価六百元
 年費六千円

昭和十年五月二十日第二種郵便物認可

印刷 平成二十年十二月二十日

発行 平成三十一年一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 加藤昌康

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五〇二一

東京都港区芝公園四・七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三七八六九四七

FAX 〇三三三七八七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 価額:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

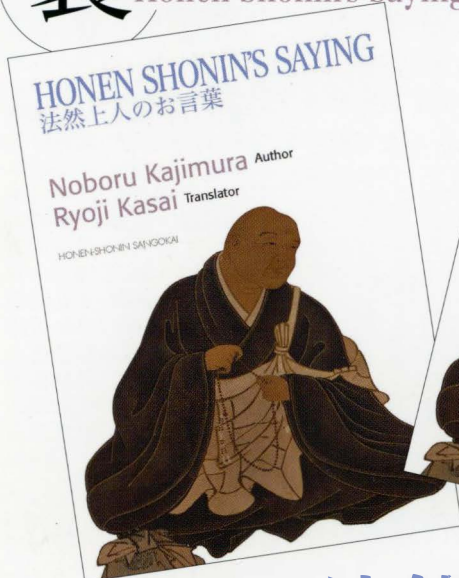
※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は価額に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊浄土の連載が 単行本になりました。

裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying



表

右開きで和文の
ご法語



和英対応法然上人のお言葉

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。
外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価1,000円(税別)
12月中旬より電子書籍でもお読みいただけます。

法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール
hounen@jodo.ne.jp へお願いします。